

## 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

The Labour Year Book of Japan special ed.

## 第五編 言論統制と文化運動

## 第五章 芸術運動

## 第二節 文学

一般に文学の分野においては、後述する俳句・短歌の場合や地方の小文学サークルの場合を除けば、組織的な形をとった抵抗の運動というべきものはまったく見られず、個々の作家の孤独な動きに止まった。個々人の抵抗という場合でも、多くは芸術至上主義的な韜晦の形か、あるいは公然たる時局への妥協と協力の「擬装」をとっておこなわれ、とくに後者の場合は客観的には侵略戦争の下請に転落し、軍国主義「国策」の推進に大きく役立たせられた。

文学作品にたいする発禁・削除については、先に「言論弾圧」の項でみた通りであるが、一九三七年六月の島木健作「再建」と翌三八年三月の石川達三「生きている兵隊」の二つの発禁事件は、たんなる行政処分ではなく、それに対応する三八年の火野葦平「麦と兵隊」の文壇的成功や「ペン部隊」の従軍（内閣情報部の要請による陸軍班一四名、海軍班八名の作家たちの漢口攻略戦への従軍）などの動きと結びついて、文学にたいする軍国主義支配の強化、多くの作家における純粋な文学精神の喪失、すなわち片岡良一の名付けた「反動文学の時代」あるいは「暗い谷間」のはじまりを象徴するものであった。それ以後「文壇」は、政府の思想統制に乗せられて、無抵抗で従順な戦争協力へとまっしぐらに転落していった。

三八年一月には武田麟太郎らの雑誌「人民文庫」が連続発禁のため廃刊となり、旧プロレタリア作家たちによって作られた「独立作家倶楽部」も解散した。四〇年には紀元二六〇〇年奉祝芸能祭祝典がおこなわれ、文芸家協会会長として情報部参与になった菊池寛発案の「文芸銃後運動」（講演会開催・傷病兵士慰問）が全国を遊説し、年内に一〇万人以上の聴衆を動員した。この年八月、山本有三は連載中の「新篇路傍の石」を「ペンを折る」の一文をもって中止した。「文壇新体制準備委員会」（九月）、「日本文学者会」（一〇月）、「日本文芸中央会」（同上）、「女流文学者会議」（十一月）、「日本俳句作家協会」（一二月）、「大日本歌人会」（四一年六月）、「大日本詩人協会」（同上）などの国策協力団体がつぎつぎと作り出された。地方にも多数の翼賛文化団体が発足し、情報局推進の文芸家協会主催「文芸銃後運動」がふたたび四一年春から翌年初めにかけておこなわれた。一方、文芸作品の発禁、削除が続出した。

四一年一二月、太平洋戦争開始とともに全国的検挙があり、宮本百合子ら多くの人が逮捕された。一方「大東亜戦争の理想を中外に宣揚するため」に、作家・詩人・歌人・俳人・評論家・国文学者が集まって大政翼賛会において「文学者愛国大会」を開催し、全国の文学者を打って一丸とする強力な組織を実現することを決議した。この組織の実現は情報局と翼賛会の主導のもとに準備が進められ、四二年五月に政府の外廓団体「日本文学報国会」（機関紙「日本学芸新聞」、のち「文学報国」）が創設（発会式は六月）された。新会員は約三〇〇〇名、小説・評論随筆・詩・短歌・俳句・国文学・外国文学・劇文学の八部会から成り、役員は情報局・翼賛会が指名し、予算の大部分は政府の助成金であった。文芸家協会は右の報国会に合流するため解散した（解散時会員四一三名）。報

国会のおこなった事業は、「大東亜文学者大会」(四二年から四四年まで年一回づつ)の開催、「愛国百人一首」「国民座右銘」の選定、辻小説・辻詩の制作、文芸報国運動講演会の開催などであった。四三年三月には徳富蘇峰を会長とする「大日本言論報国会」の発会式がおこなわれた。同月、谷崎潤一郎の「細雪」が掲載禁止となり、その後まもなく前翼賛会文化部長岸田国土の「かへらじと」が削除となり、岩上順一が検挙された。

こうしたきびしい戦争下にみられた数少ない文学的抵抗としては、「三月の第四日曜」(四〇年)「明日への精神」(同)など短篇小説や評論・感想ですぐれた仕事をし、その後は書かぬことで屈しない心を示した宮本百合子、同じく「歌のわかれ」(三九年)「斎藤茂吉ノート」(四〇年)などの中野重治、「壺井繁治詩集」(四二年)の壺井繁治、「暦」(四〇年)などの壺井栄、「火山灰地」(三七・八年)の久保栄、「光を掲げる人々」(四三年)などの徳永直、「石狩川」(三八年)などの本庄陸男、詩の小熊秀雄、金子光晴、「歴史文学論」(四二年)などの岩上順一、「現代文学論」(三九年)、などの窪川鶴次郎、文学批評における除村吉太郎などがあり、軍国主義に妥協せず良心的作品を残した「風雪」(三八年)の阿部知二、「根なし草」の正宗白鳥、「明月」(四二年)などの野上弥生子、また発表をあてにせず芸術性を失わぬ作品を書きためていた永井荷風、谷崎潤一郎その他の人々があつた。雑誌としては、「批評」・「現代文学」・「文化組織」などの中での屈折した芸術的活動があつた。

地方の文学サークル・同人雑誌グループで検挙されたものに、「開戦地帯社」および「あぶし社」(北海道函館。三八年二月検挙)「西三無産者芸術連盟」(愛知県。同六月検挙)、「東海文学社」(静岡県。同八月検挙)、秋田県の小サークル(同一〇月検挙)回覧雑誌「人間鍛冶」(東京。三九年一二月検挙)、「神戸詩人クラブ」(四〇年三月七名検挙)、「南方文芸」(香川県。同三月、高松高商学会など一二月検挙)、「文芸庭園」(群馬県桐生。同九月六名検挙)「信州文学」(長野県飯田。四一年一二月検挙)、「浪漫文学研究会」(神奈川県。同一一月以降二二名検挙)、「イズバ」(愛知県。同九月五名検挙)、「仙台詩人懇談会」(同一一月三名検挙)、「国民詩歌協会」(広島県。同一二月検挙)などがあつた。

(別掲のほか、特集「戦争下の文学・芸術」、文学、一九六一年五月・八月・一二月・六二年四月号の諸論文。和泉あき編「戦争下の文化・文学関係統制とその反応」、文学、一九五八年四月号。小田切秀雄編「講座日本近代文学史、第五巻、戦時戦後の文学」、一九五七年刊。などによる)

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動

発行 1965年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 労働旬報社

2000年2月22日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働運動【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---